

お樽さん  
〈上〉

和田 和佐

# お樽さん

〈上〉

和田 和佐



潮出版社

## お樽さん(上)

---

昭和 49 年 6 月 15 日 印刷  
昭和 49 年 6 月 25 日 初版

著 者 和 田 和 佐  
発行者 島 津 矩 久

---

東京 都 新宿 区 南元町 14-1  
発行所 株式会社 潮 出 版 社  
電話 (357) 7111(代) 振替東京 61090  
〒 160

---

印刷・奥村印刷

製本・東京美術紙工

---

落丁・乱丁はお取替えいたします

© K. Wada 1974 Printed in Japan

目次

忍び恋

五

嫁ぐ日

六

翳る日

七

子は誰のもの

一〇

再会

一三

巣立つ人々

一六

お樽さん

二〇

装画

土井 栄



お樽さん



## 忍ぶ恋

### 1

「育夫さん——お待っとうさんでした。ぼつぼつ出かけましょか——」

てる子は義妹の友子に、縫いおろしの浴衣を着せ、三尺帯を結びながら、天井に呼びかけた。すると、二階の手すりから顔をつき出したのであらう、育夫の間近い声はね返ってきた。

「はい。すぐおります」

育夫は天神祭を見に行くのははじめてである。

お米はかがみ腰になって、入口の土間で三人の下駄を拭きながら顔をあげた。

「友子、ちょっとお母ちゃんに見せてみなはれ」

「ふん」

さも女の子らしい仕草で友子は、身体ごとお米の方へ向き直った。

「ええやないの、よう似おうて、昨夜姉ちゃん、遅うまでかかって縫うてくれはったんや、汚すのやおまへんで」

「ふん」

「ふん」やおまへん、はい」だっしやる。あんた、もう小学校の二年生だっせ、返事ぐらい、

ちゃんとしなはれ」

「はい」友子はちょっと口を尖らせて、階段の方を見た。

いかにも青年らしいハズミをつけて、二階からおりてきた育夫は、てる子を見て「あっ」と思わず声をあげるところだった。

いつもは無造作に後襟で束ねた髪を、きょうはみずみずしい桃割れ髪に結いあげて、うす紺色の絞りの浴衣が、色白な彼女をいっそうなまめかしく感じさせたからであらう。

てる子の日本髪ははじめてではない。たしか二、三度は見た記憶はある。

しかし、育夫がこの家に下宿して、三年ほどの間に、てる子がこんなに眩しく見えたのははじめてだった。

それで気おくれしたのか、お米や友子のいるのも忘れて、キョトンと突っ立っていた。

(けったいな育夫さん……)

てる子はそう言いかけた言葉を唇で抑えたので、おかしさがこみあげて困った顔になった。

友子は口を生開きにして(?)ポカンと一人を見あげ、お米はそれを見て、(二人とも何をしンのや)と、三人三様の瞬間の思いである。

「姉ちゃんも二階の兄ちゃんも、なんでそない顔みてんのや?」

「えっ……いや、なんにもや」と、てる子。

育夫もドギマギとして、一瞬、眼のやり場に迷った。

「友子ちゃん、きょうはきれいやね」

育夫は苦しまぎれに、友子を讃えた。

「そら姉ちゃんの方が、ずっときれいよ」

育夫はその通りだと思ったが、押掬おしゆきのようにも聞えて、「……うん」と、鈍い返事をした。てる子はいつものはずんだ調子で言った。

「そしたら、行きましょか。育夫さん」

「はア」育夫は迷路からハジキ出された思いで、土間におり下駄をつっかけると、眼と鼻のところでお米が立っているのに、はじめて気づいた。

ふだんなら「行つてきます」と声をかける育夫だが、照れてしまって、そそくさと外に飛び出した。

宮田育夫は飛弾の高山の旧家で、宮田医院の一人息子である。大阪医大を卒業するまで、てる子の父の仙吉が真打ち板前として、三十年勤めてきた堀江の料亭「菱万」の蟲肩筋むしかきからのまれで、下宿を引き受けたのである。

てる子と友子は下駄が揃えてある土間におり立った。お米は苦笑しながら、

「宮田はん、きょうはどないぞしてはるな」

てる子はそれに応えず、

「お母ちゃん、おみやげ何がよろしい……いなり揚げ？」

「そやなア……それより、あんた出た序ついでにお店へちょっと電話しときなはれや、お父ちゃんにたのんであるけど、当てになれしまへんで」

「お母ちゃんかけといてちょうだい」

「嫌だすがな私は、そんなことで今さらお峯はんに頭さげるのは、それに深川亭もきょうは天神さんで忙しいしなァ」

深川亭はこの路地を出た角のうどん屋で、電話はいつもそこで借りているし、取次ぎもしてくれている。

「そしたら、うちからかけときますワ」

「あんばいことわつときなはれや、お店かて本祭りの晩はかき入れやさかい、お峯はんの口にかかったら、引っぱり出されまっせ」

「姉ちゃん、早よう行こうなッ」

友子が急に力一ぱい、てる子の手を引っぱったので「あっ」および腰に危うく格子戸をくぐり抜けて、てる子の「行ってきます」の声は外に出ていた。

友子の目当てはいくつもあった。まず「みつ屋」でみつ豆を食べ、夜店で金魚すくいをして、わた菓子と線香花火を買ってもらうことだった。

この路地は、北堀江の黒金橋筋にある奥まった片側の二軒路地である。路地の入口は右前が紙屋で、左側は深川亭、その板塀が路地の奥までつづき、板塀にそったわずかばかりのあき地に、仙吉が植木棚を作って、盆栽を楽しんでいる。毎年晩春にみごとに咲くあじさいの大きな株の後で、塀にからませた朝顔の蔓が、大小まちまちの蕾をつけて、明日の朝を待っている。

奥が仙吉の家で、隣り手前は「女髪結い」の軒看板を吊し、「黒金橋の小梅はん」と言えば、堀江界限で知られた髪結いさんである。

路地を出ると表通りは、軒並みに吊した祭提灯に灯が入って、宵闇にまたたいていた。祭り心にあふられた人の足が、三人―五人―二人と、松島の方へ流れて行き、天神ばやしの遠音がかすんで、西の方角がなんとなくざわめいている――。

「あっ、お兄ちゃん、どこへ行きはったのやる……」

路地の入口に立って、てる子はキョロキョロと道行く人の中に育夫の姿を求めた。すると又、友子が急に力を入れて、てる子の手を引っ張った。

「あっ！ 二階のお兄ちゃん、『大岩』の角へ隠れはった」

「大岩」は南北に通る黒金橋筋と、東西の千代崎橋通りの角にある名代の蒲鉾屋で、味が自慢で繁昌していた。（戦災で焼けて今は、東大阪市の稲田で三代目が店をかまえている）

てる子と友子が急いで「大岩」の角を曲ると、祭り客の人波をぬうようにして、千代崎橋通りを松島の方へ、ゆっくり走って行く白紵かすりを着た育夫の後姿を見つけた。

「やァー、いけずやわァ、二階のお兄ちゃん」

二人は顔を見合せて眼で笑った。

てる子は友子の手を引き、日本髪を幾分意識しながら「一、二、一、二」と、軽いかけ声をかけて育夫の後を追った。

七月は大阪の祭り月である。一日の愛染祭を皮切りに、三十一日の住吉大社の御田祭まで、ほとんど毎日のように、市内の神社で祭りがつづいている。

その七月のはじめに、日本の国をゆさぶる大事件が勃発した。

昭和十二年七月七日の夜、突如として起った蘆溝橋事件である。

それが北支事変の発端であり、さらに中国全土にわたる大戦闘に発展し、そのまま大東亜戦争に突入した。

いわばその夜の一発の銃声は、日本の敗戦につながったと言っても、過言ではなからう。

七月八日の各社新聞の夕刊一面に『北平郊外で日支両軍衝突す！』と、特号活字の大きな見出しに、大きな写真を入れて、大々的に報道された。

【北平特電八日発・北平武官室公表】——豊台駐屯の我部隊は七日午後十時ごろ、夜間演習中、蘆溝橋北方約百メートルの竜王廟附近のトーチカより、突如、支那軍の発砲を受け……云々から最後の行には、

日本部隊は自衛上やむなくこれに応戦し、目下今未明に至るも両軍は交戦中なり。

と、結んで、外交問題や諸情勢が記されていた。

七月九日、各紙朝刊には一勢に『日支現地交渉決裂す』とあり、（以下各紙新聞記事）

7月10日、『支那軍遂に撤退を了解』と、外交の手腕が讃えられていたが、

7月11日には、『支那軍撤退協定を蹂躪』中央四ヶ師団に蔣介石、北上を命令す。

7月12日、『北支出兵に朝議一決す』と、帝国政府、中外に声明、北支派兵に財界の協力。

7月13日、『支那軍戦意を欲して更に前進す』装甲列車、長辛店に出現。

7月14日、『銃後の護り総動員』

と、戦時面でギッチリ埋められていた。

さらに、中央公論社から『北支事変・特輯』が発刊され、日本公論社からも『北支事変と国民総動員』が発売された。

その頃になると、街に出兵兵士を送る歌が流れ、万歳の声と日の丸の小旗の波の列が、幟のぼりをおし立てて、大阪八聯隊や三十七聯隊の営門に向かい、大阪駅に送られて行く兵士もいた。

炎熱下の北支戦線へ父を、子を、夫を、兄を、弟を送る出征家族や、国防婦人の人たちが、道行く女性に千人針をたのむ風景が、街のターミナルや繁華街に目だち、日を追って戦火は増大し、熾烈の度をきわめていった。

そうした激戦も日本軍の連戦連勝に、大阪の祭りは最大のやま場、天神祭を迎えてピークに達した。お旅所のある松島界限は宵宮よみやと本祭りに伝統的な異色を添えて、夏の夜を多彩に色どっていた。

天神祭の渡御船は堂島川をくだって、船津橋から木津川に入り、梅本町で上陸し、本田一丁目ほんでんを抜け、松島遊郭の桜筋をねってお旅所に入る。

桜筋は廊くろわの中央を北から南へ、本田からお旅所まで一直線の大通りである。通りの真中に桜

並木の花壇があつて、その両側にずらりと何十軒もの娼妓しやうぎの置屋が並んでいる。

祭りの催し行列が遊郭に入ると、この日は娼妓たちが、二階の表手すりに出揃つて、やんやと行列に、からかったり、はやしたてる。

「ちよつと、ちよつと、兄ィちゃん、帰りしな、寄つとくなはれや——」

「待つてるしィー」

「ちよつと、神主かんぬつさん、あんた男前やなア、帰りにきとくなはれや」

「ここ、寿楼だつせ——」

「やーっ、大太鼓の兄ィちゃん、カッコええしィー」

旗を振つたり、テープを投げるやら、五色の切り紙をまき散らすぐらいいいが、ひどいのになると、赤フンドシを振つて声援を送る娼妓もいる。

そんな具合であるから、行列の若衆達はいきり立つて、催し太鼓は大揺れに揺れて、ねり回るし、獅子舞いは踊り狂い、あばれ御輿みこしは無茶あばれに揺らいで、置屋の入口をぶち毀こわす、店の見物人から「キャー」と悲鳴があがる。天神祭のあばれ御輿は毎年一人や二人の怪我人を出すので、いろんな意味で有名である。

育夫は人ごみの中で、かろうじて桜の幹につかまり、その手首を、てる子がしっかりとつかみ、友子は育夫の肩の上で、わた菓子をしやぶりながら見物している。

「すごいね」

育夫は移り変わる行列から目を離さず、熱心に見入っていた。

偶然、育夫の手首を握ったてる子の柔らかな掌が汗でじっとりとした。てる子が育夫の手に触れ、肩を並べて歩いたなぞ、きょうまでに一度もなかったことで、家においても食事のときに、給仕をしながら、ちょっと雑談をかわしたり、洗濯物を物干しへ干しにあがっても、育夫がいつも机にかじりついて、書物に眼を落としているので、「精が出ますなァ」「はァ」この程度の会話というよりは挨拶で終わる。なるべく勉強の邪魔をしないように……それがてる子の心づかいだった。

そんなことが断片的にてる子の脳裏をかすめた。今まで遠い所にいた育夫が、こんなに間近にいることは、長い間、おたがいに話したりなかったことを、今、通じ合っているように思えて、てる子は急に胸のときめきを覚えた――。その後から、きまり悪さが突きあげてきて、その手をそっと引いた。

「育夫さん」

「はァ？」

「あの……やっぱり今のうちに、お店へちょっと電話してきますわ」

「行けるかなァ、こんな人ごみで……」

「ええ、この横丁に公衆電話ありましたから」

「すみません、ぼくのために心配かけて」

「ううん、かめしません。そしたら友子をお願いします」

「はァ、大丈夫、行っちゃい」

育夫は熱っぽい眼差しで微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

てる子はその視線を親しみ深く受け止めて、その眼をチラッと向かいの置屋に走らせた。

「ここ、寿楼の前ですから、動かしといてちょうだいね。迷い子になったらいけませんし」

「はッ」

育夫が置屋の方に眼をやって、戻すと、

「そしたら……」てる子は上眼で微笑を残し、人波の間を泳ぐようにして、消えて行った。

てる子は四つ辻に出ると、電話ボックスを見つけて飛び込んだ。そこは一人だけの世界なのに、妙に落ち着けなかった。育夫への慕情が急激に心の中で広がったからなのか。それともほかになにが？……そう思いながら受話器を取った。

「もしもし、西の二六番お願いします」交換嬢が早口で「お出になりましたから、五銭お入れください」

五銭玉が機械をくぐると、

『はいはい、菱万でございます……』

お峯の声がキーンと耳に響いた。

「てる子ですけど……」

『あっ、てる子はんかいな、どないしてはるの？ 早ようきてもらわんと、大忙しのてんてこ舞いやがな』